

課題番号 101

日本社会における移民の日本語習得に関する縦断的研究

[1] 組織

代表者：鈴木 祐一

(神奈川県立外国語学部)

対応者：杉浦 元亮

(東北大学加齢医学研究所)

分担者：

鄭 嬌婷 (東北大学加齢医学研究所)

研究費：物件費 3 万円

[2] 研究経過

1 世紀の国際社会における移民の受け入れは、特に高齢者介護の現場で切実な問題である。在留外国人(移民)は 260 万人を超え、「日本は世界第 4 位の移民受け入れ大国」となった(法務省,平成 30 年)。そのため、今後の日本社会を支える人材となる移民への支援・育成は急務である。そして、この大きな社会変化の中、移民が活躍するには、「日本語の習得」が必要不可欠である。

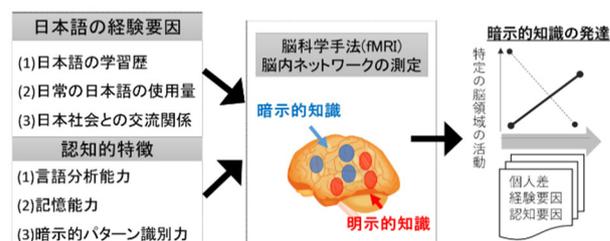
日本在留資格別で最も多い、留学生(主に東北大学生)を対象に、明示的知識と暗示的知識を習得するプロセスおよびその習得を促進する要因を明らかにすることが本研究の目的である。今までの研究代表者の調査結果から、移民の日本語能力の変化は、最低でも 6 ヶ月かかると予想される。そのため、日本語の知識を半年間以上の期間を空けて 2 度測定する。2018 年度に加齢研究所共同利用・共同研究の支援を受けて作成した fMRI 内での行う日本語のテストを用いて、明示的・暗示的な文法知識を測定する。そして、その文法知識の発達と、個人差の要因(認知的特徴、日本語の経験要因)との関係を調べることで、2 つの学習システムの一端を明らかにする。

以下、研究活動状況の概要を記す(右上図参照)。

2020 年に実施予定だった第一回目のデータ収集が、コロナ禍の影響により、大幅な延期を余儀なくされてしまった。しかし、東北大学の加齢医学研究所との緊密な連携のもと、感染対策を十分に行った上で、2021 年からデータ収集を開始することができた。具体的には、東北大学の留学生に fMRI の中で日本語の発話課題(日本語および中国語)を行ってもらった。更に同

じ実験協力者には、(a)日本語の文法知識(暗示的・明示的知識)を測定するテスト、(b)日本語の使用経験に関するアンケート調査用紙(日本語学習歴、日常生活における日本語使用量、日本社会との交流関係の強さ)、(c)認知特性(明示的・暗示的言語適性)を測定するテストも行ってもらい、行動データを得ることができた。現在、集めたデータを分析している途中ではあるが、その結果を元に、次のデータ収集経に向けた準備を行う。

移民の日本語習得プロセスの解明



[3] 成果

(3-1) 研究成果

本年度は、以下に示す研究成果を得た。コロナ禍の影響により実験データ収集開始が大幅に遅れてしまったため、現段階では、(a)日本語の文法知識(暗示的・明示的知識)を測定するテストおよび、(c)認知特性(明示的・暗示的言語適性)を測定するテストの行動データの途中結果のみを報告する。

まず第 1 に、中国人母語話者(日本語学習者)は、行動データ面に示されるように、明示的知識テストと暗示的テストのパフォーマンスに極めて顕著な個人差が見られる点が明らかになった。この点から、日本に在住する中国人母語話者の日本語能力の個人差を予測できるような主な要因が何なのかということ調べる上で重要な前提となる。

第 2 に、明示的知識テストで測られた文法的知識は、明示的な学習の適性テストの得点(LLAMA-F)と統計的に有意な相関が見られた。一方、暗示的学習の適性との相関は全く見られなかった。

第 3 に、暗示的知識テストで測られた文法知識は、明示的な文法知識テストおよび明示的な学習の適性テストの得点との相関は見られなかった。これらの結果は、暗示的知識の学習は、意識的な学習とは独立し

ていることを支持する結果と解釈できる。

上述したように、現在、fMRI 内で行った発話課題のコーディングおよび脳イメージング分析を行っている最中である。コーディングが終わり次第、発話課題中の脳活動と、(a)日本語の文法知識（暗示的・明示的知識）(b)日本語の使用経験、(c)認知特性の関係を探る。その結果は、国際学会および国際学術誌へ投稿する予定である。

今後の展望としては、2021年1月に集めた脳活動データおよび残りの行動データの解析を行いながら、次の実験の計画を行う。コロナの感染状況を鑑みて、次のデータ収集のタイミングを決断する必要も出てくる可能性があるが、データ収集を行う東北大学の加齢医学研究所における感染対策方針に則り、2021年後期には予定通りに実験を進めたい。

(3-2) 波及効果と発展性など

本共同研究は、研究代表者と東北大学の杉浦教授、ジョン専任講師を始めとする研究者の研究交流により、本プロジェクトに更に発展させることを計画している。具体的には、日本人英語学習者を対象として、英語力を向上させるための教育介入研究を行いたいと考えている。

本共同研究のプロジェクトには、初期段階から、東北大学の修士課程および博士課程の3名の学生が積極的に関わってきた。研究代表者の指導の元、彼らには被験者の募集から、実験の遂行の補助、そしてデータ分析の補助を行ってもらった。若手研究者の育成の観点からも、この共同研究プロジェクトでの経験が、博士課程の学生自身の研究へも良い影響を及ぼしている。

[4] 成果資料

(1) Suzuki, Y., Jeong, H., Cui, H., Okamoto, K., Kawashima, R., Sugiura, M. (2020, March). The neural mechanisms of explicit and implicit knowledge: Comparing elicited-imitation and word-monitoring tasks. Paper presented at the 2020 Annual Conference of American Association for Applied Linguistics. Sheraton Denver Downtown, Denver, Colorado. [Cancelled due to the COVID-19 pandemic]

(2) Suzuki, Y. & Jeong, H. (2020, October). The neural foundations of explicit and implicit knowledge: Comparing elicited imitation and word-monitoring tasks. An invited talk given for ESRC-JSLARF Symposium (Zoom)